

## 岩田中将流罪の物語の創作基盤

—『夢の通ひ路物語』における先行物語撰取の方法一面・統考—

中 道 一 日 入 子

はじめに

『夢の通ひ路物語』は、「権大納言系物語」と「かざしの君系物語」という二つの物語系から成っており、「かざしの君系物語」はいわゆる継子物語の系譜に位置づけることができるようである。しかし、一連の物語をかざしの君という女主人公の物語と断じてしまうには少し問題が残る。たとえば、市古貞次氏は、継子物語を十の要素にまとめられたが、「かざしの君系物語」がその定義にぴったりあてはまるわけではない。一番の問題は、かざしの君の救済者たる岩田中将の流罪に関わる物語の扱いである。継子物語において、男の遍歴は、あくまで「継子」の女君救済を目的とするものであるのが本来であるろうが、岩田中将の場合は事情を異にする。

兄岩田大納言が藤垂女御に宛てた恋文を、麗景殿女御に拾われ、その犯人に仕立て上げられたのである。しかし、岩田中将は、兄への孝行だと、自らその罪に甘んじる。一方、兄のほうはそれを悲し

んでか、自殺を遂げる。物語には、岩田中将の流調中の生活も多く描かれ、また、何よりも彼は権大納言の夢告を受けた人物でもあることから、「かざしの君系物語」の救済者という役割ではなくれない、むしろ岩田中将物語と呼ぶにふさわしい物語が展開されているのである。

無実の罪で流離の憂き目を見るといえば、古来、菅原道真をはじめ、幾多の伝説がある。岩田中将流罪の物語は、それらの伝説からどのように影響を受けているのだろうか。中世における流罪物語の特徴や、流罪説話との関わりにも注意しながら、岩田中将物語の創作基盤にせまりたい。

### 一 『源氏物語』の影響

岩田中将物語は、巻三・五・六に亘って、主筋の物語に時折折り込まれる。巻三では、流罪に至る経緯と兄の自殺が描かれる。そして、流刑地播磨へ送られる場面と、播磨で中秋の名月を見て都を懐かしむ場面とが、実に印象的に描かれる。巻五では流刑地での生活の中で「吉松」という少年（後に彼は住吉明神の化身であることが知られる）に出会い、彼に助けられながら生活している様子が描かれる。そして、巻六で、権大納言の夢を見、住吉明神が姿をあらわし、都へ帰るまでの経緯と、その後の生活が描かれて幕を閉じる。

一連の物語に強く影響を与えているのが、『源氏物語』須磨巻であることは疑いない。とりわけ、月を見て都を偲ぶという場面は、

須磨卷の名場面でもあり、『夢の通ひ路物語』においては、卷三と卷六の二度に分けて影響が見られる。該当する部分の本文を比較してみよう。まず、須磨卷には次のような叙述がある。

月のいとほなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけり、と思し出でて、殿上の御遊あそびひ恋しく、所どころながめたまふらむかした、思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられたまふ。「二千里外故人心」と誦じたまへる、例の涙もとどめられた。〔中略〕その夜、上のいとつかしう昔物語などしたまひし御さまの、院に似たてまつりたまへりしも、恋しく思ひ出でさこえたまひて、「恩賜の御衣は今此に在り」と誦じつつ入りたまひぬ。御衣はまことに身をはなはず、傍に置きたまへり。

(二・五四〜二五)

一方、それに対応する『夢の通ひ路物語』本文を引用する。

イ月きら〜とさへわたりしにぞ、おもへば今宵こそ名におふ夜半ぞかし、もろこし人さへめつるとや、まして都にはいとゞのとけくめでたまふらめ、一条の中納言、宮の中将こそ、よにうるはしきまどぬなりしをと、過にし年の事をさへ思しつゞけ給。

(卷三・三三〇〜三三三)

口月のかほのみさやかにてらして、さし入影に、我御すがたのくまなく見ゆるにぞ、「いたくもそこなひけるかな。此いとひけもなき木の葉衣も、袖かなしや」とて、打かへすべき袂はあらねど、「さりにし頃、うつり香、留とどめし給ひつる御ぞは、爰に

有」と、ひとりこち給へり。

(卷六・七七)

『夢の通ひ路物語』は卷三・卷六の二度にわたるので、便宜上イ・ロと付した。傍線部がそれぞれ対応することになるが、著しい章句の一致はないものの、全体的に『源氏物語』のこの場面を下敷きにしていると考えてよいだろう。「十五夜」を「名におふ夜半」と言い、『源氏物語』には「二千里外故人心」や「恩賜の御衣」と、さらにその典拠である『白氏文集』や『菅家後集』からの引用が見えるのが、『夢の通ひ路物語』のほうでは、それを連想させはするもののやさしい言い回しに改められている。さらに、ロのCの記事は、岩田中将が実際には「御衣」を持っていないようであることから、引用でであることが明らかで、我が境遇を菅原道真の境遇に重ねたのだと読むだけでなく、道真に我が身を重ねた源氏を念頭に置いているの叙述と見ることが許されよう。

また、ロの記事直前にある夢告(権大納言が岩田中将の夢にあらわれて帰京の予告をする)場面についても、源氏が桐壺院を夢に見ることから想を得たと考えてよいであろう。

一方、章句レベルにおいては、明石巻や玉鬘巻からの引用が散見される。たとえば、岩田中将の流罪が決定して、いよいよ舟に乗る場面には、

かの君をば、いたわしくも、遠き世ばなれたるさかひへ、さすらいつかはしまいらする。御年は廿五ばかりにて、いとうつくしう若やか成御けしき、見奉るしづの男さへ泪落しぬべくおも

とあり、「世ばなれたるさかひ」は、この後、ごく近いところにも、さすが世ばなれぬるさかひなれど、人の心は様々にて、此たづきなき御事、見きく人は、なみだをおとして、聞なれ給ぬ声してことゝひまいらせ、御くだものなど目馴ぬうつわに入れてもて参、すゝめ奉るも有り、

(卷三・三六)

と再度の使用が認められる。この二つの文章は、播磨という地が世間から遠く隔たった辺境の地であるということを強調する。そしてまた、見送る賤の男が涙するさまや、その地の人間が都の人間である流され人に同情し、物質的援助をするさまを物語ったものである。賤の男や地元の人への視線は、明石巻にも見出せる。

まづ追ひ払ひつべき賤の男の、睦まじうあはれに思さるるも、我ながらかたじけなく、屈しにける心のほど思ひ知らる。

(二一・三四)

また、『源氏物語』に「世ばなれ」は九例あるうち、「世ばなれたるさかひ」は一例のみで、それは若菜上巻において、明石中宮が、母の出自を知る場面に明石の地を「さる世離れたる境」と説明されているものである。先に引用したイの記事の「月きら〜」とという表現も明石巻にある。

飽かず悲しくて、御供に参りなんと泣き入りたまひて、見上げたまへれば、人もなく、月の顔のみきらきらとして、夢の心地もせず、御けはひとまれる心地して空の雲あはれにたなびけり。

そのほか、配流の旅路の道中のことが、

よにさわりあるといふなるひゞきのなだも、夢のこゝちに過行て

(卷三・三六)

とあるのは、玉鬘巻に、

ひびきの灘もなだらかに過ぎぬ。(中略)

うきことに胸のみ騒ぐひびきにはひびきの灘もさはらざりけり

(三・四五)

とあるのに同じで、我が心など無視するかのように、舟がどんどん進んでいくのを、かなしく思う心境も共通するだろう。岩田中將を送ってきた舟がまた都へ帰るのを見送る場面は、

船ををし出す。帰る波路もつらやましう、げに、物いはゞことづてやらましと、おもふもかひなき事ぞかし。猶人わろうなる、おこがましけれど、せめてはななくさむ事もやと、こぎ行舟どもを見やり給へば、舟こ共、「おもふ事なげに浦つたひして」ときこゆるも、いとゞしき御心ちに、

なき名をもおふる磯辺にあざりしてこゝ舟人の声もわびしきかずしげき御物思ひに、打ながめ給へれば、めなれ給ひし舟は、はやこぎくれて、木の葉をうかべぬる様におほゆ

(卷三・三四〜三五)

と語られるが、ここに描かれる「舟子」が歌を歌う情景も玉鬘巻に、京の方を思ひやらるるに、返る波もつらやましく心細きに、舟

子どもの荒々しき声にて「うら悲しくも遠く来にけるかな」とうたふを聞くまに、二人さし向ひて泣きけり。(三・八)

・舟子ども、「唐泊より川尻おすほどは」とうたふ声の情なきもあはれに聞こゆ。(三・五)

とあるのが連想される。なお、「掃る波路もつらやましう」はもととは『伊勢物語』第七段にある業平の歌「いとどしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくもかへる波かな」を踏まえているが、この歌の引用は『源氏物語』にも二例見え、また、中世物語にもよく引かれるので、とりたてて『源氏物語』の影響を見る必要はないだろう。

## 二 行平中納言への言及について

一方で、よく似た章句についても、『源氏物語』との違いが見出せるものがある。周知の如く、須磨という地は行平の籠居した地であるところから、須磨巻には、

・おはすべき所は、行平の中納言の、深塩たれつつわびける家る  
近きわたりなりけり。(二・三九)

・須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の関吹き越ゆると言ひけん浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれるものはかかる所の秋なりけり。

(二・一六)

と、行平への言及が見える。傍線部は、

○『古今和歌集』卷十八・雑歌下・九六一

田村の御時に、事に当りて、津国の須磨と言ふ所に籠り侍けるに、宮のうちに侍ける人に、遣はしける 在原行平朝臣  
わくらばに問人あらば須磨の浦にもしほたれつ、侘ぶとこたへよ

○『統古今和歌集』卷十・羈旅歌・八六八

つづくにのすまといふ所にはべりけるととき、よみ侍りける

中納言行平

たび人はたもとすすしくなりにけりせきふきこゆるすまのうら風を踏まえたものである。

一方、『夢の通ひ路物語』に見える行平への言及は、旅立つ時に、忘れがたきなでしこの、なに心なく引きとゞめ、つねよりはまつはれしを、「今かへりこん」となくさめしひと言も、つひのかたみとこそなりにけれ、(卷三・三二)

とあるものと、播磨の地で、

打かたらふべき人もあらねば、磯うつ波、松ふくあらしの音のみこそ、うきをとぶらふ心ちして、かの行平が「まつとしきかば」といひしも、うらやまれつ、我は只夢ならで、いつの代にかはさる人くをも見あはずべき、(卷三・三六)

とあるものである。二例とも、『百人一首』にも取られる著名な歌、○『古今集』卷八・離別歌・三三五

題しらず

在原行平朝臣

立わかれいなほの山の峰に生ふる松としきかば今かへりこむを引く。岩田中将が流された地が「播磨」とはいえ、行平が須磨に籠

居した時の歌ではなく、「因幡」の地名を含むこの歌を引くのは納得しがたく、ふさわしい引歌とは言い難い。

ところが、後に謡曲「松風」へと発展する物語草子「松風むらさめ」にこの歌が引かれている。これは、行平の須磨時代を描く恋物語の一種であるが、そこには、行平が須磨へ下るに際して詠んだ歌として一首が引かれているのである。もともと行平中納言の須磨籠居については、「古今集」の詞書のほか手掛かりがなく、かなり有名な事実であるにもかかわらず詳細はよくわからない。ためにさまざまな憶説が付加されていった結果、「松風むらさめ」にあるごとく、帝妃に恋して須磨に流され、そこでの女性との恋物語を描き、という実際の行平像から隔たった行平像が、つくられていったようである。

西村聡氏によると、「立わかれの歌の解釈ひとつをとっても、任国から都へ帰る時の歌という理解から、都を離れる時の歌という理解への変化がたどられるようである。中世に著される、『古今集』『百人一首』『源氏物語』『伊勢物語』などの注釈書には、奇妙な説を展開するものもあり、人々の関心に応じて、歌の理解も変わっていったと推測される。『夢の通ひ路物語』がこの歌を引いたのもそうした行平像変化の過程での創作によるものだったからと思われる。

もう一例、岩田中将の心中を記す叙述に、

から国に沈し人も我ごとやおぼし乱けん (巻三・三六)

という一節がある。「源氏物語」では光源氏の歌に、

唐国に名を残しける人よりも行く方しられぬ家のをやせむ

(二・一七〇)

と近い表現があるものの、これは、諸注によると、楚の屈原を念頭においたものとされる。

しかし、それよりも表現の近い次の歌があり、こちらは新日本古典文学大系(岩波書店)の脚注によると、漢の顔驄(文帝・景帝・武帝と不遇に過し、訴歎を容れた武帝に抜擢された)を思つて詠まれたとされている。

○『千載集』巻十六・雑歌上・一〇二五

堀河院御時、百首歌たてまつりける時、述懐の心をよめる

藤原基俊

唐くににしづみし人もわがごとくみやまであはぬ嘆きをぞせし  
以上のように、一見「源氏物語」に近い表現と見えても、「源氏物語」より時代の下る歌集や古註の類から影響を受けたと思われる表現があるわけである。

### 三 類型表現の多用

先に「世離れたるさかひ」という語が二回見えると述べた。この流罪中の岩田中将を描いた場面には、ほかに、類型表現の多用が認められる。

「かぎり」という語は、出立にあたって「此の世のかぎりならまし、

とおぼす」とあり、播磨へ送ってきた役人との別れに際して「今をかぎりのわかれならねど」と言うものの、心中「いつをかぎりとさだめぬ」境遇を嘆く、というように、三度にわたって用いられている。

また巻六においては、いよいよ播磨での生活も十年以上たったことも関係してか、朽ち果てた衣類が「木の葉衣」と表現される例が二度、「松葉衣」が一度あるほか、

・ 木のは衣を御身にまとい、名はたのもしき松の葉に、うき命をながらへ給。  
(巻六・五五)

・ 泪に松葉の袖も露をきそへつ、  
(巻六・五〇)

のように「衣」を指すと思われる「松葉」が二度にわたって使われている。

あてのない流罪生活で、中将の思いは沈む一方である。その暗さが「かぎり」の多用にあらわれ、また、着る物さえ満足にない、朽ちていくばかりの状況を「木の葉衣」「松葉衣」という言葉の多用にあらわしたものと思われる。「松」に「待つ」ことに疲れ切っている岩田中将の姿が透き見えるのと言うまでもない。

ところで、「木の葉衣」という語は、平安時代・鎌倉時代の物語類には例が見えず、見出せたのは謡曲の『雨月』に、

木の葉の雨の音づれに、老いの涙もいと深き、心を染めて色々、木の葉衣の袖の上  
(六四頁)。

とあるものである。この語の初出はいますし調査を重ねたいが、物語には珍しい語であるとは言えよう。

さて、類型表現の多用に加えて、和歌的表現も多く見出せる。例をあげると、「嶋の朽ち木と身をかへて」「波のあわさへたよりなげなり」「磯辺もくらき夕霧に」「いつれの山ぞさほ鹿の声」といった具合である。

「いつれの山ぞさほ鹿の声」は引歌と思しき歌が存する。

『惟宗光吉集』秋・九九 (※光吉の生存は三〇三―三三三)

月をのみひとりながめてふくる夜にいつれの山ぞさほ鹿の声

ただ、これは九月十三夜の月を詠んだもので、院(後宇多院)に奉った歌ということである。詠作状況を踏まえるとやや疑いが残る。

#### 四 軍記物語との接点

すでに引用した部分で気付かれることと思うが、このあたりの文章は、いわゆる七五調の美文がたいへん多い。声に出して読むと、歌のように調子が良い。その理由は、和歌的表現を駆使していることに主に由来するのであるろう。が、それだけではない。たとえば、「神ならぬ身の浅ましう」という表現に類似したものとしては、『元物語』(下巻・為義の北の方身を投げ給ふ事)に「神ならぬ身の悲しさよ」とある。また都にいる権大納言と宮の中将が岩田中将を思い出す場面には、二度にわたって「いつれか秋に」と『平家物語』祇王の「もえいつるも枯るゝもおなじ野辺の草いつれか秋にあはではつべき」の引用がある。

こうした軍記物語との類似表現や引用を見ると、また、軍記物

語の特色の一端がその七五調の美文にあることを思い合わせるとき、作者の視界にこれらの軍記物語もあったことが想像されるのである。

ところで、名月の夜、岩田中将が思い起こした故事がある。

「つみなうてはい所の月をみんは」といへる、よをすて人の筆す  
さみも、かへりて身にはつらきかたにやおもひなさましと、袂  
をかたしきふし給へど、ねられ給はず。 (卷三・三七〇)

ここにある「罪なうて配所の月をみんは」という表現には、言つまでもなく、顕基中納言の故事が思い起こされる。後一条天皇の寵を受けて中納言に昇進、天皇の崩御後、三十七歳にして出家した顕基に言及する記事は中世の説話にも多く存する。『発心集』に、

いとみじきすき人にて、朝夕琵琶をひきつつ、罪なくして、

罪をかうぶりて、配所の月を見ばやとなん願はれる。 (第五)

とあり、『撰集抄』に、

朝に仕えしそのかみより、ただ明け暮れば、あはれ、罪なくし

て、配所の月を見ばやとて、涙を流し、 (卷四)

云々とあるほか、『江談抄』『袋草子』『宝物集』『古事談』『十訓抄』に見える。いづれも顕基が風流人であつて、配所の月を見ばやと願つたことが語られるのだが、ここで気にかかるのは、『夢の通ひ路物語』の本文は「見ばや」でなく「みんは」となっていることである。「みんは」とあるのは、「見る」ということは「と」の意味で、そのあとには、その行為の意義付けが続くことが予想される書き方である。

そのように見ると、『平家物語』卷三・大臣流罪に、

もとより罪無うして配所の月をみんと云ふ事をば心あるきは人の願ふ事なれば

とあつたり、『徒然草』に、

顕基中納言の言ひけん、配所の月、罪なくて見ん事、さも覚えぬべし

とある文に近い。さらに、そのあとに、「よをすて人の筆すさみ」とあることから、ここでは「徒然草」を意識しているのではないかと考える。

このように、軍記物語や『徒然草』のような隠者文学からの影響が見出せることは、『夢の通ひ路物語』の中世らしさを生み出すことにもなつていよう。

## 五 中世物語の流罪

ところで、同じ中世物語の『松陰中納言物語』にも、松陰中納言が隠岐に流されるという物語が存する。『松陰中納言物語』における流罪の物語の展開を、岩田中将物語との類似点に注目しつつ、簡単にまとめると、次のようになる。

1 麗景殿女御宛の恋文が発端(「ぬれきぬ」)

2 松陰中納言、隠岐へながされる途中、明石の浦で九月十三夜の月を見る(同)

3 息子、父の島流しを嘆き、須磨に籠もる(「あしの屋」)

4 隠岐での生活が過ぎてゆく。不思議な夢の告げがあり、友人の阿闍梨に語って行く末に望みを持つ。その年の秋、帰京。

この物語との類似は章句レベルでも認められるが、『松陰中納言物語』には、『夢の通ひ路物語』以上に「源氏物語」須磨巻からの引用が見え、しかもこの物語の成立年代が定まらずかなり下ると思われることから、互いの影響があったかもしれないが、前後関係は想定しにくい。

また、散逸物語のなかにも、流罪物語であったことが想定されるものが少なからずある。

『夢語り』は『風葉和歌集』に五首の歌を採られる。そのなかにも、世中いと煩しき事ありてかうらいといふ国に放ち遣はされける道にてよめる

夢語りの宰相中将

浪枕知らぬ旅寝の悲しきにいく世を限る道の空ぞも

高麗といふ国に放ち遣はされける道にてあまのしほやく煙のたなびくをみて

夢語りの宰相中将

神も聞けもしほの煙焦れても咎むばかりの思ひありきや

という二首が存する。詞書から察するに、この宰相中将は無実の罪で高麗に流されたもののようである。残り三首のうち二首は前関白の歌で、もう一首は前関白が夢告を受けた春日明神の歌である。

五首の歌と詞書から、愛する女を失った前関白が出家しようとするが夢告を得て思いとどまり関白になるといふ話と、宰相中将が無実の罪で高麗に流されるという話と、この二つの事件があったこと

は推察される。二つの話がどう関わるのかは不明だが、このような悲恋物語と流罪の物語とが共存していること、夢告が描かれていること、という二点に『夢の通ひ路物語』との共通点があり、非常に興味深い作品ではある。

また伊地知鉄男氏の紹介された逸名物語六編のうち、一編に「高明公はなかされたまひき」との文があり、これも、后と高明との悲恋をテーマにした流罪の物語らしいことがうかがえる。

これらの中世物語相互の関係については、にわかには言及できないが、岩田中将の物語がこれらの物語から想を得た可能性も無いとは言えない。

おわりに

岩田中将流罪の物語は、全体に『源氏物語』須磨巻を下敷きにしている。けれども、そこに描かれた、兄の身代わりとして流罪になることを孝養ととらえ、その精神が強調されていることや、弟に罪をかぶせた責任をとるような形で兄が自殺していることなどに、中世らしさを認めることができよう。そして、章句レベルにおいても、『源氏物語』だけではなく、他の先行する中世物語の影響や、中世の文学作品の影響をも受けていることが確認できるのである。

この物語に二つの物語系が見えることをはじめに述べた。岩田中将物語の中世らしい表現の特徴は、もう一方の権大納言系には見出せないこともある。そのことから、二系の書き分けの意識をうか



がうこともできようし、また、改作説に何らかの手掛かりを得ることにもなるかもしれない。

〔注〕

(1) 『中世小説の研究』(東京大学出版会 昭30)

(2) ただし、源氏の流された須磨は、地理的には播磨国ではない。

(3) 『源氏物語』の引用本文は、日本古典文学全集(小学館)により、所在の巻数と頁数とを示す。

(4) 『夢の通ひ路物語』本文は、基本的に古典研究会叢書『夢の通ひ路物語』(汲古書院 昭47)により、同書の頁数を示した。

ただし、歴史的仮名遣いに改め、仮名の清濁・句読点・引用符等は私に付した。

(5) 「在原行平の像形成——古注を経て(松風)に至る——」『室町文学叢集1伊勢物語註』(徳江元正氏編 三弥井書店 昭62)

(6) 引用は日本古典文学大系(岩波書店)『謡曲集・下』による。

(7) 小木喬氏『散逸物語の研究平安鎌倉時代編』(笠間書院 昭48)は、二話の関係を「不明」とされる。松尾聰氏『平安時代物語の研究』(東寶書房 昭30)は、

・宰相中将の罪といふのは、時の権勢者の女で帝の御寵愛深き方にも道ならぬ思を寄せたといふ嫌疑によるものかも知れない。

・さて前関白が恋人を失へる事件とこの宰相中将の流罪事件と

は直接関聯があつたか、どうかは全くわからないが、二人の人物と二つの事件が共にめだつた人物、事件であつたらうとすれば、この二人の間に女性をはさんで、何等かの関係があつたらうことは臆測されて然るべきであらう。あるいは、前関白と宰相中将とは相對する勢力で、後者は前者に敗れて流竄の運命を背負はされたのかも知れない。

という推測を述べておられる。

(8) 「擬古物語と連歌関係資料」『中世文学』第十号(中世文学会 昭40)

——あんどろ・ゆりこ、広島大学大学院博士課程後期在学——